

「上野の杜から(25)」

東京藝術大学構内の芸術家群像

地球の温暖化によるものでしょうか、上野公園のソメイヨシノの開花は早まり、近年は3月末には満開となるのも珍しくありません。昔は入学式が行われる4月の初めが桜吹雪だったのですが、今では卒業式の頃……となってしまいました。

ところが、今年はこの10年間の中ではソメイヨシノの開花は最も遅く、4月の声と共に満開を迎えることとなりました。

当財団に隣接する東京藝術大学の入学式も4月5日、花冷えの感がした日でしたが、桜の花びらが舞う中、無事執り行われた次第です。

今回は、その東京藝大の構内に建つ彫像についてふれてみます。像は全部で28あります。美術学部の門を入るとすぐ左手側に建つオーギュスト・ロダンの「青銅時代」が目に入ります。これは大正時代に親日家のフランスの美術商エルマン・デルスニスから寄贈されたもの。彼は他に木立の中に建つバルザック像の原型となった石膏像も寄贈しています。



音楽学部のキャンパスに入り、奏楽堂をめざして歩を進めると、まず目に入るのが東京音楽学校時代にピアノの教官として多くの門下生を育てたロシア出身のピアニスト、レオニード・クロイツァーのレリーフ。その隣りはおなじみのベートーベンの胸像。これは紀州徳川家第16代当主にして音楽家としても知られる徳川頼貞から寄贈されたもの。そして生誕200年を記念して2010年にポーランドから寄贈されたショパンの胸像がつづきます。



残るはすべて日本人となりますが、まもなく創立140年を迎えようかという東京藝大において功労のあった教官を顕彰する記念像が建立されたのは明治43年(1910)初代彫金教授・加納夏雄の胸像が最初とのことです。

胸像が多い中で2人だけ全身像の人物がいます。ひとりは大学の前身である東京美術学校の事実上初代校長であった岡倉天心。もうひとりは第5代校長の正木直彦。

天心像は横山大観たちが発起人となり、天心を崇拝する平櫛田中が原型を作りました。木立に囲まれた六角堂の中で校長の椅子に座り、思索するその姿は構内に建つ全ての記念像の盟主のようです。



東京藝術大学ではコンサートや展覧会、秋の大学祭など、年間を通じて一般の方も入れる機会が多いと思います。そんな折り、像をご覧になってそれぞれの芸術家が残した作品から、芸術家が歩んだ人生劇場・ドラマにふれてみるのは、そのまま日本近代美術史の1ページをめくることを意味するのではないのでしょうか。



FOUNDATION FOR CULTURAL HERITAGE AND ART RESEARCH

公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団